

2015年度の教育活動等に対する学校評価書

2016年3月22日
学校法人聖隷学園
聖隷クリストファー大学附属
クリストファーこども園
総園長 太田 雅子
学校関係者評価委員

1. 園目標

<愛>	神様と周りの人に愛されていることが分かり、自分を大切にする気持ちをもつ。
<思いやり>	様々な人々との関わりを通して、思いやりの気持ちを育み共に生きる喜びを知る。
<たくましさ>	自然の中で思いきり遊び、感性やたくましい心と体を育む。
<いのち>	食に関わる体験を積み、いのちがつながりあい、支えられていることに感謝する。
<表現力>	自ら様々なことに取り組み、考えたり表現する力を身につける。
<自立>	生活に必要なことが分かり、自分から身に付けようとする。

2. 2015年度の重点課題（事業計画）

- ・新たな園庭環境の整備（3年計画の1年目）を行う。
- ・『かぜの時間』の保育を充実・向上させる
- ・『ラーニング・ストーリー』の視点に沿った保育に向けて研修を重ねる。
（振り返り、アセスメント、保護者との共有）
- ・3歳児入園者定員45名確保する。
- ・地域子育て支援「カンガルー」のための環境整備（遊具等）を行う。

3. 自己評価結果とそれに対する学校関係者評価結果

（※評価は、○・・・目標どおり達成できた、△・・・十分に達成できていない・次年度の課題である、で表している。）

評価項目	具体的な取り組み	自己評価		学校関係者評価委員会	
		評価	こども園としての反省と改善策	評価	意見
教育・保育方針	[支援の必要な子どもに対する適切な対応] ・子どもたち皆がクラスの一員。 ・仲間として生活しているという意識を高めるための働きかけを行う。 ・個々の関心やニーズを視点としたサポート体制を作る（考案するための話し合いや研修を行う）	○	・発達支援に関する研修会に参加し、そこで得た知識や学びを基に個々の特性に合わせた支援ができるようにした。特に配慮が必要な幼児に対して個別に担当する保育者の配置を行った。		・担任だけでなく学年全体で丁寧に対応しているのがよく見えてわかる。個別の担当者が1対1で向き合うというよりは、特別な配慮が必要なところを見逃さないように注意して適宜フォローできるとよいと思う。
	[食育の計画を立て実践する] ・未満児の子どもたちも職員と一緒に楽しく食事する。 ・以上児の子どもたちはキッチンの職員と一緒にランチ準備や片づけをする。 ・栽培、収穫したものを使って、クッキングをし、食べることを楽しむ。 ・地元の特産、身近な食材など様々な食材を使ってクッキングを楽しむ。	△	・キッチンと協力をして、クッキングを行った。魚の解体を見せたり、新たな食育のための方法を検討し実施した。食育の充実を図るために11月より新たに栄養士（正規職員）を採用した。しかし今年度は年間の見通しをもった計画を立て実施するには至らなかった。	○	・保護者向けの食育講座は、家庭での食への意識付けになった。また、ランチの試食もとても良かった。今後も保護者に対しての啓発（レシピの掲載・献立の立て方のコツ等）を継続してほしい。 ・保育では、さらにクッキングの回数を増やし子どもたちが食への興味関心を持つきっかけになるといい。 ・保護者も含めて、よい「食」に対する意識が高まると良い。
	[キリスト教保育について理解を深める] ・聖書箇所の間計画、聖書の学び、礼拝を一貫したテーマのもとに実施する。 ・外部講師等を招いてキリスト教保育についての園内スタッフ研修を実施する。 （年2回）他のキリスト教保育の園での保育を体験したり、キリスト教保育の研修会により多く参加する。	○	・聖書箇所の間計画、聖書の学び、礼拝を一貫したテーマのもとに実施することができた。 ・キリスト教保育連盟静岡クラブの研修を本園で実施し、キリスト教保育を実施する他園の保育者と交流を図ることができた。		・子どもの成長を「できない」ではなく、一人ひとりがその子らしく成長している姿を記録するのは、保育者の確かな感性と手間を必要とする。着実に少しずつ積み上げていけば良いと思う。 ・ラーニングストーリーの保護者へのフィードバックにより、より良い保育につながると思う。 ・保護者としては自分の子どもの記録が残るのはとても嬉しいが、先生方の負担を考えると難しい。（全員分の学びの瞬間の写真撮影・こどもの内面を文章化）
	[主体性・自己肯定感を育む保育を展開する] ・『ラーニング・ストーリー』の視点に沿っての記録・援助を行い、保育者間および保護者と子どもの育ちについて共有する。	△	・主体性・自己肯定感を育む保育に向けての認識は高まったが、記録を取る上での視点が保育者間で十分に統一できていなかった。		

評価項目	具体的な取り組み	自己評価		学校関係者評価委員会	
		評価	こども園としての反省と改善策	評価	意見
特色ある保育の展開	[園庭の整備計画（3年計画）を実施する] ・『どんぐりの森』『ビオトープ』『スクーター小屋（ボール投げのための屋根）』を保護者会と協力し整備する。	△	・日よけ機能を持つ『木登りの森』を設置し、園庭で木登りを実現できた。 また、保護者会と一緒に『どんぐりの森』『スクーター小屋（ボール投げのための屋根）』の整備に着手できた。『ビオトープ』作りは計画を立てたが実施は次年度になる予定である。	○	・環境づくりの活動自体にこどもたちが参画していくプロジェクト保育を計画するとよいのでは。完成を急ぐのではなく、一緒に考えながら工夫を重ね、ここぞという時にプロの力を借りて進むことが貴重な学びになるのでは。 ・2016年度に計画されているビオトープ作りがどのようなものになるのか保護者としてはとても楽しみにしている。保護者と協力して作り上げていく活動に期待している。
	[領域「音楽」「言葉」の活動を通しての感性・表現力の育ちを図る] ・音楽（楽器）やリズムを媒介として自分のイメージを自由に表現したり心の解放を図る保育実践を行う。（大学教員から指導を受ける）	△	・行事と関連しての表現活動、リズム遊び、お話作りは、子どもたちが興味を持って参加したが、年間を通しての計画的な実践が必要であった。		・年長児がジョンカミツカ氏のピアノコンサートに参加し、プロの演奏に触れることができたことは貴重な体験だったと思う。 ・保護者としては、年度末に持ち帰る子どもの作品集を通して成長が感じられ嬉しかった。
	[大学こども教育福祉学科との連携] ・『新入園児サポーター』『サマーフェスタ』『プレイデー』に向けての大学生参加の計画を早めに見通しを持って立て、学生が主体的に参加できるように工夫する。	○	・大学生に対してオリエンテーションを実施したことにより、自分の役割等が理解でき、主体的に参加するようになってきた。		・大学とは、計画的な実践にこだわるよりも、困った時に気軽に相談しあえる関係の方が理想であり、そうしたネットワークづくりが必要だろう。 ・子どもたちにとっては大学生ならではの魅力があると思う。高校生、中学生、小学生の年代の子どもたちともまた違った交流をするのではないだろうか。 ・大学生の保育参加は、貴重な学びの場になっている。
	[近隣の施設との交流を図る] ・高齢者施設、障害児施設の人々との自然な関わりができる場や活動を計画する。（年2回）	○	・高齢者施設の方々や海外の方々の来園と交流が十分になされた。今後は障害者の方々との交流を図れるようにしたい。		・高齢者施設に出かけるのは、訪問先にとって嬉しいことだと思う。子どもたちのためには、特別な場所で出会うのではなく、日常生活の中で出会う機会がある方がいいような気がする。また、高齢者の方々に本園を訪問してもらう機会があるとなお良いと思う。
	[育児について相談しやすい環境を作る] ・ティータイムなどを設けてリラックスしながら話ができる環境を作る。 ・園長たちを中心に玄関などで保護者に積極的に話かける。 ・リトミックなどを取り入れ、子どもと一緒に遊ぶ方法を知らせる。	○	・お茶とお菓子を用意し、なごやかな雰囲気の中で「カンガルー」の実施ができた。 ・リトミックは外部講師を招いて2回実施した。		・先生方は忙しそうで話しかけられずにいる保護者もいるだろうから、個別に相談できる仕組みがあることを園だより等に載せもっと周知したらどうか。

評価項目	具体的な取り組み	自己評価		学校関係者評価委員会	
		評価	こども園としての反省と改善策	評価	意見
保育環境の充実	<ul style="list-style-type: none"> 『かぜの時間』の保育室の環境改善（3部屋を使用）を行う。落ち着いた家庭的な環境となるように工夫する。 保育計画・記録や評価を着実にしながら保育の質を向上させる。 『かぜの時間』便りを定期的に発行し、子どもたちの様子を保護者に知らせる。 	△	<ul style="list-style-type: none"> 『かぜの時間』便りを定期的に発行することができた。 大学の研究者と共に研修を行い環境の見直しを実施したが、「より家庭に近い環境」を整えるという点においては課題が残っている。 	△	<ul style="list-style-type: none"> 目指している「落ち着いた家庭的な環境」とはなんだろうか。家庭的な空間づくりか、少人数での時間か、親しい関係か、具体的なイメージを持てると良いと思う。 大学教員として、研究へ協力いただいていることに感謝している。早く研究成果を現場の先生方へ還元できるようにしたい。
保護者との連携	<p>[情報の掲示・発信方法を改善する]</p> <ul style="list-style-type: none"> 子ども一人ひとりの成長の様子を掲示したり、園便りを用いて、保護者にわかりやすく伝える工夫ー掲示のためのボードを見やすい場所に設定する。 子どもの成長・発達の道筋や乳幼児にふさわしい保育・教育について発信する。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 園だより、クラスだよりや廊下の掲示を用い、オープン保育（参観会）や入園説明会において、子どもの成長・発達の道筋や乳幼児にふさわしい保育・教育について発信することができた。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 取り組み始めたラーニングストーリーを重ねることで、関係する業務を省力化しつつ家庭との連携を図ることができると思う。ラーニングストーリーが活用されるようになれば、保護者の満足度はかなり上がるのではないかと考える。 保護者としては、連絡ノートや、個別の連絡で一人ひとりの保護者に声をかけてもらえるのが良かった。
	<p>[保護者同士の交流・保護者会の活動]</p> <ul style="list-style-type: none"> 園庭開放を計画的に行い、保護者同士の交流の機会を設ける。 保護者ボランティア活動を保護者主導で行う仕組みを作る（保護者会役員を中心として） 	○	<ul style="list-style-type: none"> 保護者会の役員を中心に多くの保護者が主体的にボランティアを行い、園の教育を支えてくれた。 園庭開放を行ったり、保護者間の交流を行ったが一部の保護者に留まっていたように思える。 		
入園児募集	<ul style="list-style-type: none"> 新たなホームページを作成し、保育の内容（行事）を、わかりやすく提示する こども園のパンフレット（ポリシーブックレットやしおり）を作成する。 園だよりのコラムを用いて、子どもの成長・発達についての学問的根拠を示していく。 	△	<ul style="list-style-type: none"> こども園のポリシーブックレットを作成し入園説明会時に配布した。 園だよりや掲示を通して、子どもの成長・発達についての学問的根拠に基づいた説明を行った。 園の保育内容・行事についてホームページ上で表示することは不十分であった。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 保育に関する基本的な考え方、姿勢が伝わる大切であるが、実践が評価されることで口コミで地域に評価が伝わると思う。
小学校との連携	<ul style="list-style-type: none"> 5歳児クラス担任による小学校の授業参観を行い、小学校教育を理解しながら保育内容を考え実践に移す。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 卒園後の様子を伺いに小学校を訪問した。特に小学校に入学してからも継続的に支援の必要があると考えた子に対しては、小学校側と懇談を行った。さらに、学習支援が必要な子に対して園として場を提供した。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 卒業後も必要な支援をする姿勢は嬉しい。他の支援につながって支援の輪を広げることも視野に入れると良いと思う。

評価項目	具体的な取り組み	自己評価		学校関係者評価委員会	
		評価	こども園としての反省と改善策	評価	意見
スタッフの資質の向上・連携	<p>[個々の子どもに合った保育の展開ができる力を身に付ける]</p> <ul style="list-style-type: none"> 『ラーニング・ストーリー』の視点に沿って保育を振り返り、明日に向けての保育を考える力を各自が身に付けられるようにする。(研修計画を立てる) 各保育者・スタッフが自分の課題やゴールとそれに見合った研修計画を立て、学んだことを報告し合う。準職員の園外研修会への参加を積極的に行う。 オフ・ジョブトレーニングを取り入れ、報告し合う。 	△	<ul style="list-style-type: none"> 各保育者が自分の課題や興味に合った研修計画を立て、学んだことを報告し合う機会を設けた。準職員の園外研修会への参加も多くなされた。 オフ・ジョブトレーニング(休みを利用しての主体的な研修)についての報告の機会を設けた。 「ラーニング・ストーリー」の研修を行ったが、個々の保育者の理解に差がある。本園に見合った方法と共通理解を図りたい。 	△	<ul style="list-style-type: none"> ラーニング・ストーリーのスキルアップをするためにはOJT(実践の中からの学び)がなされることが大切だと思う。着目すべき子どもの成長の姿を、熟練者が新任者等にその場で解説することで、成長の姿を見る目が養われるように思う。 「子どもと共にいることは、1/3の確かさと、2/3の不確かさ・新しさを持って仕事をする(マラグッツィ)」という言葉のとおり、1/3の確かさである一般的な発達の知識や、学びを支える環境の知識が必要である。個々の学びの物語(ラーニングストーリー)を発見するためには、普遍的な学びの枠組みが必要である。それをベースにして個々の学びを発見し語り合うことが「学び合う同僚性」を築くために重要だと思う。 保護者としては、このような研修をしているという事を、保護者にもっと伝えてもらえると嬉しい。 園内公開保育は、そのために設定した場面ではなく、日常の保育を見てもらってその後、意見交換するような方法も良いのでは。 「21世紀の教師は『教え』ではなく『学び』の専門家にならねばならない」という言葉がある。若手保育者だけでなく、全保育者が子どもから、そしてお互いから学び続ける雰囲気と環境を作り出すことが若手にとっても「学ぶことが楽しい」と思える職場づくりになると思う。「ベテランが若手を指導する」という図式は若手を委縮させベテランの成長を止めてしまう恐れがある。ベテランも新任教員のまなざしから学べることはあるはずである。 教員により保育にばらつきが出ないよう、引き続き研修・公開保育等を実施してもらいたい。
	<p>[若手保育者への個別指導]</p> <ul style="list-style-type: none"> 園内公開保育を月1回の割合で実施し、アドバイスを受けながら、自分の保育を振り返り・保育を向上できるようにする。 	△	<ul style="list-style-type: none"> 園内公開保育は2回実施し、大学教員のアドバイスを受けて自分の保育を振り返る機会を設けた。当初の毎月の実施が思うようにできなかった点においては次年度の課題とする。 	△	
実習生等受入れ	<p>[大学附属園としての実習受入・事前事後指導]</p> <ul style="list-style-type: none"> 臨床(地)教授として、第一・第二園長を始めとして、大学生を育てることに対する意識の向上を図る。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 第一・第二園長が臨床(地)教授として大学での講義を含めて学生の指導に当たった。主幹保育教諭がオリエンテーションを実施し、行事等を通しての学びができるように留意した。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 負担にならない程度に大学生に関わることは、どの保育者にとっても、自分自身の良いふり返りの機会になると思う。大学生も、現場の実際を感じる機会になると思う。 現場の先生方に大学に来てもらい、大学の教員とは異なる角度から講義してもらえるので、大学生たちにとって大変実り多い学びとなっている。

評価項目	具体的な取り組み	自己評価		学校関係者評価委員会	
		評価	こども園としての反省と改善策	評価	意見
安全管理 危機管理	<ul style="list-style-type: none"> ・感染症・事故・食物アレルギー発作に対応する実践的研修会を行う（年3回） ・園バス利用保護者連絡網を作成する。 ・災害時の職員の勤務についての基準を作りマニュアルとして明文化する。 	△	<ul style="list-style-type: none"> ・感染症・事故・食物アレルギー発作に対応する実践的研修をこども園会議に合わせて実施し全職員の理解を図り、意識づけを行うことができた。 ・園バス利用保護者連絡網を作成できた。 ・聖隷学園全体としての災害時の対応マニュアルが作成されたので、全職員が十分に理解できるようにしたい。 ・駐車場での安全を確保するための安全教育（職員・園児・保護者）を充実させたい。事故防止を徹底したい。 	△	<ul style="list-style-type: none"> ・感染症の流行は少なく園の体制が整っている証拠だと思う。 ・感染症対策、防災対策、事故防止などは、マニュアルを非常時に活かせるか（訓練の徹底）が重要だと思う。 ・自分自身、降園時の駐車場では何度か危険な場面に遭遇した。保護者・園児への教育・発信は重要である。自分も反省するところがあったので、駐車場での事故が起こる前に、ルールを守れるよう園の呼びかけに対して、保護者同士でも声を掛け合いたい。
園経営全体の向上	<p>[職員間の連携と協働を図る]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・未満児会議・以上児会議を勤務時間内に実施するための勤務体制を作る。会議出席者が学年・クラスの他の保育者に内容を十分に伝えることができるための手段を講じる。わずかな時間でも共通理解を図るためのコミュニケーションスキルを増す。 	△	<ul style="list-style-type: none"> ・未満児会議・以上児会議を勤務時間内に実施した。クラスリーダーが会議に参加し、他の保育者に説明するようにしたが、理解や認識のずれがあった点が課題となった。次年度は、専任職員は全員出席し、共通理解を図るようになりたい。 		<ul style="list-style-type: none"> ・勤務時間内に会議ができるように工夫しているのは素晴らしい。効率のよい会議は、事前準備とファシリテーターのスキルによって改善すると思うが、日常のスタッフ同士のコミュニケーション(信頼関係)によっても左右されるように思う。 ・直接の保育でない部分についても目標をもって意識的に改善を図ることは大切だと思う。事務系の職員の専門性が生かされる場所であるかもしれない。 ・「よい支援」と「働く立場での都合よさ」はどうしても対立的になりがちである。最低限のルールは必要であるが、本人も意識して、無理しすぎないように工夫し、保育へのモチベーションが下がらないようにすると良い。 ・残業はあらゆる職業にもつきもので難しい課題であるが、保育の質にも影響する事なのでぜひとも改善されるようお願いしたい。
	<p>[保育準備、事務的作業の環境整備]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昼寝等の時間を有効活用して、書類整理を行う手立てを考え実行する(パソコンの保育室での使用・管理) ・備品等の整理整頓・管理を徹底し、作業の効率化を図る。 	△	<ul style="list-style-type: none"> ・効率よく書類整理を行う手立てを考え実行するためにパソコンの保育室での使用・管理を行うようにした。 ・備品等の整理整頓・管理を行い、全員が平時から心掛けるようにしたが、共有で使用する物、場所についての徹底が不足している。(次の人が探してから使用することになる) 	△	
	<p>[休暇の取りやすい環境づくり]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行事等に向けて、見通しを持って、ゆとりのある計画を立て、残業を極力減らすようにする。 ・休みを取りやすいように工夫し、スタッフ間での協力体制を強化する。(学年ごとに保育者同士が補うようにする)(休暇取得希望を早めに提出してもらい調整を図るようにする。) ・『ゴールデン代休』を整えリフレッシュをすることができるようにする。 	△	<ul style="list-style-type: none"> ・休みを取りやすいように、休暇取得希望を早めに提出してもらい調整を図ることができた。 ・『ゴールデン代休』を整えリフレッシュをすることができるように配慮した。 ・残業に関しては改善しつつあるが、行事前の残業が多いため、計画的に早くから準備をすることが例年どおり課題として残った。 		